

奪われゆく日常、削り取られる魂

—あなたに伝えたい沖縄の現実—

山城莉乃

(沖縄YWCA副会長、琉球弧の先住民族会(AIPR)副代表)

たった80年前、奪われなくてもよかった無数の命が無惨に奪われた。「軍隊は市民を守らない」「基地の存在は攻撃の標的になる」という血の教訓を得たはずなのに、命を犠牲にした方々に思いを馳せながらも、島がいまだに軍事化され続けるのを止めることができない。この無念さは言葉にできません。いつまで私たちの声は無視され、人々は分断され、土地や水が汚染され、海が破壊されなければならないのか。いつまで女性たちが性被害の恐怖に晒^{さら}され、暴行や強盗、軍用機の墜落に怯え続けなければならないのか。自分の島にいながらも、目の前で大切なものが次々と奪われていくのを、私たちはいつまで見続けなければならないのか。胸が締め付けられる。痛い。

基地の存在が「当たり前」になっていく現実。甥っ子や姪っ子、そして私たち自身の世代でさえ、米軍基地や日本軍基地(自衛隊)が存在しない沖縄の景色を想像することすらできない。基地から派生する事件や事故が起きるたびに、怒り、虚しさ、そして深い無力感に襲われる。日々の理不尽に潰されそうで吐きそうになる。しかし、人間はずっと絶望したままでは生きていけない。だからこそ、若い世代を含め、多くの人がこの苦しみにから逃れるために、現状をどうにか肯定し、正当化しようとする。心の奥底では、これが沖縄に対する「差別の構造」であると気づいているのに、自分自身をごまかして生きなければならない。この自己欺瞞^{ぎまん}を強いる状況こそが、何よりも残酷で苦しい。

どんなに現実をすり替え、前向きに捉えようとしても、私たちの土地、自然、そして琉球人としての尊厳が侵され続けているという事実は変らない。差別の構造が温存されたまま犠牲を強いられ、年々「日本化・日本人化」が進む中で、琉球の歴史、土地との結びつき、自分自身のアイデンティティとの乖離^{かいり}が広がっていく。少しずつ自分の魂が削り取られていくような、息の詰まるような苦しさの中に私たちはいる。

日本の人は想像できるだろうか。異国に侵略され、日本語が奪われ、野蛮と罵^{のの}られ、日本文化や精神性が否定されることを。先祖から受け継

いだ場所が捨て石と化して、軍事基地だらけの島になることの苦しさ、悔しさを。

慰霊の日が来るたび、パフォーマンスのように沖縄へ「慰問」に訪れる首相や政治家たち。彼らは神妙な面持ちで「沖縄の平和を願う」と語る。しかし、その舌の根も乾かないうちに「沖縄に米軍基地を置くことはアジア・太平洋地域の安全を守るためだ」と言い放ち、私たちに平然と犠牲を強いる。この欺瞞を、絶対に許してはいけない。

だからこそ、東京の人、日本の人たちに本気で考えてほしい。日本政府から見れば、私たち琉球人はいつでも切り捨てられる「トカゲのしっぽ」であり、命の重さが同じだとは思われていないのが現実。しかし、政府から「守るべき国民」として意見や命が重く扱われている日本の皆さんには、沖縄に不条理と犠牲を押し付けている現実を「遠い南の島のこと」にしないでほしい。軍隊や基地を押しつけて成り立つ平和を、平和と呼ばないでほしい。沖縄の犠牲の上にある日常を、自分たちの責任として見つめてほしい。日本人として本気で声をあげてほしい。

真の平和は、琉球・沖縄が自己決定権を取り戻し、日本と対等な関係を構築しない限りは獲得できないと思う。その大きな一歩として「戦後100年」を迎えるまでに、いっさいの軍事基地がない沖縄を目指したい。そのために私ができることは、諦めず、希望を持って私らしく活動が続けていくことだと改めて思います。